

時調 (野崎充彦)

このpdfは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第4巻(くろしお出版・2008年)の内容見本です。ISBN 978-4-87424-410-4。無断引用はご遠慮ください。『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/

## 時調

—— 朝鮮的叙情のかたち ——

野崎 充彦 (のざき・みつひこ)

### 1. 形式・名称・起源



韓国の無形文化財41号は、名唱として名高い金虎成(김호성 1942-)である。彼が吹き込んだCD『金虎成正歌』(KING RECORD社 1996)には十五曲の時調が収録されており、その冒頭を肅宗(숙종)代に領議政(영의정)をつとめた南九萬(남구만 1629-1711)の作品が飾る：

東窓이 밝았느냐 노고지리 우지진다  
소 치는 아희놈은 상귀 아니 일어느냐  
재 너머 사래 긴 밭을 언제 갈려 하느니

(1293)

東の窓は白めりや ひばり さえず 雲雀の囀る  
牛飼いの童は いまだ起きざるや  
峠越えの 畝長き畑 いつ耕さん

(“1293”などの作品番号は『韓国時調大事典』のもの。なお、ハングル表記は理解しやすいよう適宜改めた。原文については本書を参照されたい。)

今これによってその音数律を見れば、ほぼ次のようになる。

初章 3・4・4・4  
中章 3・4・4・4  
終章 3・5・4・3

つまり、時調とは初・中・終の三章からなり、各章は4前後の音節を持つ語彙を4句ずつ並べ、総数45程度の文字から構成される定型詩歌を指す。これを平時調(または短時調)といい、もっとも典型的でかつ作品数も多い。時調にはこの他の種類もあるが、それらについては後述する。

ここで注意すべきは、音節のまともりは現代韓国語の分かち書きに従うのでは

なく、あくまで朗唱した場合の調子によることである。上の例で言えば、終章の「사래 긴 밭을」を「사래긴밭을」のように、5音節の塊りとしてとらえるのである。この感覚は文字面を追うだけでは分かりにくいだろう。「百聞は一見に如かず」ではなく、「百見は一聞に如かず」。CDなどを聞き（そのテンポは謡曲よりスローだが）、かつ声に出して吟じ、体感するほかない（因みに、朗唱では終章の結句の3音節は省かれる。하느니または하노라など、詠嘆を表す決まり文句が多いためである）。

5・7・5調を基本とする日本の俳諧でも字余りどころか、中には「炭団法師火桶の穴より 覗ひけり」（蕪村）の如く6・8・6調までであるように、時調もさほど定型に厳格なわけではなく、多少の増減は許される。ただ終章に限り、第一句は3音節、第二句は5音節以上にすべきとされるものの、これとて絶対というわけではない。終章の第一句を4音節にした例（鄭澈 정철 作）も無くはないからである：

풍파의 일리던 배 어드러로 가단 말고  
구름이 머물거든 처음에 날 줄 잊지  
허술한 배 두신 분네는 모다 조심하시소

(4437)

風波に揉まれし舟 いくこに 行きしや  
雲陰しければ もとより船出せぬものを  
よるべなき舟持つ人 みな 心すべきぞ

さて、和歌なる名称は『古今集』「仮名序」（和歌は人の心を種として万の言の葉とぞなれりける）以来、千年のあいだ変わらない。一方、時調は当初から定まったものではなく、短歌・詩余・新翻・長短歌・新調など、様々な呼称が併用されたという。時調なる語は、「一般の時調の長短を排せしは、長安（ソウル：筆者注）より来たる李世春（이세춘）」という申光洙（신광수 1712-75）の『関西楽府』（관서악부）での用例が文献上の初出とされる。また、李学達（이학규 1770-1835）の詩「感事34章甲申」の一節「誰か憐れむ花月の夜、時調まさに凄懷たり」の注に、「時調とはまた時節歌と名づく。みな閭巷の俚語にて曼声もてこれを歌う」とあるように、詩歌としてではなく、当代の歌謡としての名称だったのである。

## 時調 (野崎充彦)

このことは言い換えれば、時調が初めから明確な文学ジャンルとして意識されなかったことを示唆し、それがまた時調の起源の曖昧さをもたらすこととなった。時調の発生については、外来起源説と在来起源説の2つがある。前者は中国の仏歌や漢詩の翻訳から派生したとし、後者は朝鮮の民謡や郷歌(향가),あるいは高麗歌謡の形式が変容したものとするが、今日では高麗歌謡変容説が有力視されている:

어름우희 댛넙자리 보와	氷上に 竹の葉のしとね敷き
님과나와 어러주글 만정	主と私と 凍え死すとも
정둔 오날밤 더디 새오시라	情交わせし今宵 夜の明けざらんことを

これは高麗歌謡「滿殿春」(만전춘)の一節だが、4音節を主とする歌詞に時調との共通性が確かに感じられよう。

## 2. 時調の担い手と作品

### 2.1. 一片丹心——時代の激動に殉ず

現存する時調集には、乙巴素(을파소:高句麗)や成忠(성충:百濟),それに薛聡(설총:新羅)といった古代人の名を冠した作品が収録されているものの、それらは後世の仮託であって実作とは認められていない。高麗歌謡に淵源する時調にふさわしく、その担い手は朱子学を奉じた士大夫たちだった。それゆえ、彼らの命運と作品世界は密接に連動している。以下、作品に反映されたその心象風景を見ることにしよう:

이몸이 죽어 죽어 一百番 고쳐 죽어  
白骨이 塵土되어 넋이라도 있고 없고  
님 向한 一片丹心이야 가실 줄이 이시라

(3274)

この身 死に死にて 百たび死すとして  
白骨 塵となり 魂魄ありとも消ゆとも  
君への一片丹心 変わる事あらんや

これは韓国人なら誰もが知る鄭夢周(정몽주 1337-1392)の丹心歌(단심가)

である。衰亡の危機に瀕した高麗王朝に節を貫き、李成桂（이성계）一派の懐柔（これも時調「何如歌」（하여가）として伝わる）を拒んで殺された悲劇は古今に名高い。一片丹心とは見なれぬ表現かもしれないが、韓国では学校でこの作品を習うこともあり、人の真心や誠実さを表す言葉として日常語化しているほどだ。

ところで、ハングル創成以前の鄭夢周がどうやって時調を書いたのか？と怪訝に思われる方もあろう。実は、今日流布する丹心歌は『青丘永言』（청구영언）や『歌曲源流』（가곡원류）など、18・9世紀に編纂された時調集に掲載されたもので、それ以前には遡れない。では全く根拠のないものかといえば、そうとも言い切れない。何故なら、沈光世（심광세 1577-1624）の『海東楽府』（해동악부）に見られるように、漢訳された時調が残っているからである：

此身死了死了 一百番更死了  
白骨為塵土 魂魄有也無  
尚主一片丹心 寧有更改理

これがその漢訳詩だが、では、これは何をもとに書かれたのだろうか？それは口伝によるものと考えられている。つまり、「創作→口伝→漢訳→ハングル表記」という過程を経て、多くの古典時調が蓄積されていったわけだが、それはハングルの普及が遅れた朝鮮詩歌にとり、避けられない運命だった。無論、その中には明らかな誤りも含まれる：

가마귀 싸호는 곁에 白鷺야 가지마라  
성넨 가마귀 흰 빛을 새울세라  
清江에 조히 씻은 몸을 더러일가 하노라

(36)

鳥鳴き騒ぐ谷間に 白鷺よ 行くなかれ  
性<sup>さが</sup>荒き鳥は 白きを憎むゆえ  
清江に<sup>きよ</sup>潔めし身を 汚さんかと恐る

これも『青丘永言』や『歌曲源流』所載のもので、死地に赴かんとする鄭夢周を止めようと母親が詠んだものとして知られる。しかし、彼女が鄭夢周の晩年まで生存したかどうかは定かでなく、その上、李希齡（이희령 1697-1776）の

時調 (野崎充彦)

『葉坡漫録』(약과만록)には、この時調によく似た漢詩が李希齡自身の作として記されていることを思えば、鄭夢周の母が作者だとは考えにくいだろう。このような例は他にも見出すことができる。しかし、作者不明だからというだけで作品の価値そのものを否定するのは早計、かつ狭量に過ぎよう。なぜなら、たとえ「よみ人知らず」だったとしても、時調はまぎれもなく朝鮮社会の産物であり、その時代に生き、時代と喜びや悲しみをともにした人々の心の結晶体であることに違いないからである：

五百年 都邑地를 匹馬로 돌아드니  
山川은 依舊하되 人傑은 간 데 없네  
어즈버 太平烟月 꿈이런가 하노라

(2945)

五百年 <sup>みやこ</sup> 都邑の地 <sup>おと</sup> 匹馬にて訪なえば  
山川は古に変わらざるに 人傑の姿なし  
ああ 太平の烟月 <sup>おもかげ</sup> 夢かと思わるる

鄭夢周門下で朱子学を学び、高麗末期に科挙に及第して官職についたものの、その後は野に下り、王朝が替わっても二度と仕官しなかった吉再(길재 1353-1419)の「懷古歌」(회고가)である。五百年都邑の地とは高麗の都だった開城のこと。ソウル遷都後、急速にさびれ行く旧都への挽歌が聞くものの心に銜してやまない。

受難は高麗の旧臣のみならず、朝鮮王朝のもとに参集した士大夫たちにもふりかかった。叔父の世祖に王位を追われた端宗(단종)の復位を謀り、凄惨な最後を遂げた死六臣の一人である成三問(성삼문 1418-1456)は「忠義歌」(충의가)を残し、おのれの節義を誇らしげに詠いあげている：

이몸이 죽어가서 무엇이 될고 하니  
蓬萊山 第一峰에 落落長松이 되야이서  
白雪이 滿乾坤할 제 獨也靑靑 하리라

(3273)

この身 死すれば 何にかならん  
蓬萊山 第一峰 枝垂るる松となり

白き雪 天地に満ちるとき 独り青めり

「歳寒くして然るのち、松柏の後れて凋るを知る」とは『論語』(子罕篇)の言葉だが、凍てつく厳冬のさなかでも青々しい枝を保つ松を、あくまで忠節を貫き、義に死す自分に喩えたものである。

## 2.2. 日常の陰影

国家の非常時に際しては身命を賭すのが士大夫たるものの“noblesse oblige”<sup>ノブリス オブリージュ</sup>だとはいえ、彼らとて常に緊張状態にあったわけではない。士大夫も人の子、というのは俗に墮した言い草だが、日常のあいまに一人の人間として吐露する、その思いを受け入れるのも時調という文学形式の役割だった：

한 손에 가시를 잡고 또 한 손에 막대 잡고  
늙는 길 가시로 막고 오는 白髮 막대로 치러터니  
白髮이 제 먼저 알고 지름길로 오더라

(4505)

めて いばら ゆんで  
右手に茨を 左手に杖持ち  
老いは茨で 白髪は杖で打たんとせしに  
白髪 先に知りて 捷徑して来たり

朱子学の深い造詣と高潔な人格で名を馳せた、高麗の禹卓(우탁 1263-1343)の作である。「老いらくの来むと知りせば 門さして無しと答へてあはざらしものを」と『古今和歌集』にも似た発想の歌があり、老いの訪れに人生のたそがれを痛感するのは人の常。これを「嘆老歌」(탄로가)と呼び、漢詩にも多い：

糟糠 三十年에 즐거운 일 없건마는  
不平 辞色을 날 아니 뵈었더니  
머리해 늙은 날 버리고 혼자 가랴 하시는고

(3685)

糟糠 三十年 樂しきことの無かりしに  
不平がましき色 見せしことなきを  
髪白き我を捨て ひとり先立たんとは